

教育実習後アンケート並びに高校側への意見聴取から教育実習に関わる教職科目での今後の指導課題に関する一考察*

伊藤 律夫 †
Ritsuo ITO

【概要】

本稿の目的は、本学教職課程科目「教育実習」での受け入れの現状と課題を、実習生への事後アンケート並びに静岡理工科大学教職課程教育実習連絡協議会での高校代表校（3校）からの意見聴取をもとに明らかにし、教育実習に関わる教職科目についての今後の指導課題を整理し考察するものである。

1. はじめに

本学における教職課程は、これまでに22名の学生が卒業後に教員となり、昨年には新卒でありながら静岡県教員採用試験に合格し、県内の県立高校教員として活躍する者も輩出することができた。

本学では、教職課程の履修者がこれらの資質能力を磨き上げるために、1年から4年までの成長を見通した適切なカリキュラム（教育課程）を編成し、授業を進める一方で、教職支援室を中心に学生1人ひとりをきめ細かく支援する体制を整えている。

そんな中、教職課程を履修する学生にとって最大の難所といえるのが「教育実習」である。この教育実習での成果が、履修生の、その後の教員志望意志を高め、さらなるレベルアップに繋がると考えても過言ではない。そのため、充実した実習となるよう、送り出す大学側として「事前及び事後の指導」は非常に重要である。さらには、多くの実習生を受け入れている高校側からの意見も聴取しながら、より質の高い実習生を送り出し続けていく必要がある。

そのため、今回、平成29年度に「教育実習」に参加した本学学生11名からの事後アンケートの結果並びに、静岡理工科大学教職課程教育実習連絡協議会において受け入れ高校として参加した公立2校、私立1校の代表者からの意見聴取をもとに、今後の教育実習に関わる教職科目の指導課題について整理・検討していくことを目的とする。

2. 結果

2.1.1 アンケート調査方法

平成29年度教職課程履修者の内、「教育実習」に参加した4年生11名に対して、実習参加後にアンケート調査を実施した。

2.1.2 アンケート結果

アンケート結果を以下に示す。（記載内容は学生が回答した原文のままとしてある。）

設問1

教育実習校の受入れ体制についてどのように感じましたか。

- ・実習生1人に対しての指導等が非常に丁寧であった。
- ・全教員が積極的にアドバイスをしてくださった。
- ・卒業した学科（情報）と免許を取る学科（理科）が異なる中で、HRを卒業した学科に配属してくれた。
- ・事務手続きが早く、受入れ体制がしっかりされていた。
- ・教室を準備してもらい、やりやすい環境だった。
- ・文化祭の準備がありとても忙しい中、熱心な指導をいただきました。
- ・忙しい中、多くのアドバイスをいただけた。
- ・受入れの前日から、入念に打合せをして準備ができたため。
- ・先生方も、事務の方も、とてもよくしていただき、実習に専念することができました。今日も頑張ってるね！と声をかけていただけて、とても嬉しく思いました。
- ・非常にあたたく指導してくださり、授業見学等の勉強の機会をたくさんいただけたため。

設問2

教育実習に参加して、特に学んだ（勉強になった）と思うことなんですか。

- ・生徒に向けた発問の仕方（何を求めているか、分かりやすく、簡単に伝えること）。
- ・授業に取組む姿勢（教材研究、板書計画を何回も行い、試行

* 2017年度教職課程運営委員会 年度報告書（9pt）

† 静岡理工科大学教育開発センター（9pt）

錯誤すること)。

・生徒と関わることの大切さ（信頼関係や授業の活性化につながること）。

-
- ・朝礼、終礼の時の生徒指導の方法。
 - ・教員としての挨拶について。
 - ・高校の授業を教えるにあたって、生徒が中学でどのくらいの内容を学んできたかの把握がとても大切であると分かった。
 - ・おもしろさ=知的好奇心である。
 - ・報告、連絡、相談の大切さが分かった。
 - ・人に伝えることは想像以上に難しかった。
 - ・教員になるためには子供が好きだけではなく、それなりの覚悟が必要である。
 - ・生徒との接し方。
 - ・話の聞かせ方。
 - ・生徒との距離が思っていた距離より遠く、生徒1人1人を見ることがいかに難しいかということ学んだ。
 - ・自分が準備していても、教壇に立ってみると想定したことでないことが起こることもあり、生徒の目線に立って授業を組み立てることの難しさを学んだ。
 - ・教科の専門性が足りていなかったこと。
 - ・生徒に数学の問題をやって見せること。
 - ・事前準備が8割くらい占めている気がする。
 - ・指導案は大学で作ったものは、あまり役に立たない。
 - ・授業の形態や話し方一つで、授業の雰囲気が変わること。
 - ・様々な方向からの説明をするためには、多くの知識が必要であること。
 - ・生徒に対する接し方のオンオフの仕方がなかなかつかめなかったが、先生方に指導していただいたことで、HRや授業などの「先生」としての立場と、時間外でのオフの立場のメリハリをつけることができた。
 - ・2つのクラスで同じ授業を行ったが、同じように行うということは難しく、より良くしようと思っても、時間が足りなくなってしまうことがあり、調節が難しかったが、終わらせることを目標にするのではなく、理解してもらえることを大切に授業づくりをしていくことが大切だとより実感した。
 - ・先生方が生徒のために影で努力されていること。
 - ・板書、発問、演習の技術力。
 - ・定期試験の活用法（フィードバックだけでなく、生徒のモチベーション向上のためにも使う）。

設問3

後輩たちへ教育実習に関してアドバイスしたいこと

・教育実習でしか得られないものが必ずあると思います。一般企業や大学院を考えている人にとっても、必ず役に立つことを学ぶことができるので、短い期間ですが、真剣にそして積極的

に取り組んでください。

- ・教材研究をしっかりとやってください。
- ・適度な緊張感が一番良いモチベーションを作る。
- ・前もって早いうちから準備するほうがよい。
- ・初日に馴染めないと大変。
- ・教職の授業での模擬授業等ではしっかりと準備し、粘り強く励むことが重要であると思いますので、頑張ってください。
- ・自分から声を出せるようになる。
- ・教科の専門性をみがいておこう。
- ・予定を上手に組み立てられるようにしておこう。
- ・コミュニケーション能力が大事。
- ・説明をよりイメージしやすくさせるために、実際の日常生活に関わることを使いながら説明していった方が良いと思う。
- ・先生方に注意されることも多いですが、素直に受け止め、自分に足りないものは何か、社会人として大切なことは何かをよく考えていくことが大切だと思います。怒ってくれる人や、注意してくれる人は今しかいないので、時間を大切に過ごして、生徒の前に立った時、胸をはって話ができるように頑張っておきたいです。生徒の前では必ず笑顔であることを忘れずに、実習していけるように普段から心掛けられるようにしていくと良いと思います。
- ・生徒と触れ合う時間として大部分を占めるのが授業であり、授業を通じて生徒と信頼関係を築くのが大切だと感じました。

設問4

教育実習に関して、本学教職課程が今後もっと充実（整備）させたほうがよいと思うこと

- ・学習指導案の書き方。
- ・学習指導案の書き方をもっと深く。
- ・模擬授業の際に、生徒役は「中学でこのくらいは学んできた」を把握しておく、もっと良くなるかな。
- ・模擬授業やスピーチの時間をもっと長く取ってほしかった。
- ・もう1週間長く。
- ・お理工塾もそうですが、学生が生徒と触れる機会を増やすべきであると思いました。具体的には、袋井市等でやっている塾のボランティアの告知をもっとやると、学生自身もそのような機会を増やせると思います。
- ・情報学部の数学志望の人が、数学の専門性を高める機会をもっと増やしてほしいです。
- ・今のままで良いと思う。
- ・高校に行った時に、スクリーンを使っている先生が多かったので、一回使って説明する等して慣れておいた方がよいと思う。
- ・授業で使用するプリントを一度作る機会を設けた方がよいと思います。使わない人もいると思いますが、一度やっておくこ

- とで、見やすいプリント（スライド）の作り方を知っておくことができると思います。
- ・板書になると字が上手く書けないことがあるので、もっと練習すべきだと思いました。
 - ・模擬授業を増やす。

2.2 受け入れ高校代表者からの意見聴取

2.2.1 静岡理科大学教職課程教育実習連絡協議会

当該協議会は、本学の教職課程履修学生の教育実習を円滑にするために平成22年に設立された。本学教職課程担当教員及び公立2校、私立1校の代表者を含めて構成され、教育実習に関する調整、諸課題の解決を目的と運営している。

2.2.2 意見聴取方法

平成29年度静岡理科大学教職課程教育実習連絡協議会参加者の高校代表校（3校）に対して、意見聴取を行った。参加校の属性と参加者職位を表1に示す。

表1 高校代表3校の属性と参加者職位

学校名	公立・私立	参加者
F校	公立	副校長
K校	公立	教員
S校	私立	校長

2.2.3 意見聴取結果

設問1

各校での教育実習の現状と課題について

- ・大学側で、指導案の作成の仕方や校内でのマナー等を細かく指導されているようで非常に助かっている。
- ・大学で作成している実習用テキストなどを持参してくれているが、実際には高校側にそんな余裕がない。
- ・工業の専門授業は実施回数が少なく、2週間の間に実習生が授業できるのは全部で3回程度、そのうち1回は研究授業となり実習生にとっては少なくなってしまうのが課題である。
- ・近年の特徴として、保健体育の実習生が半数を占め、その他は国語や社会が主であり理系の科目で実習に来る学生が少ない。
- ・近年の実習生は人前でも堂々と話ができる様に感じている。
- ・一方、板書は苦手な学生が多く、文字の書き順等において気になる部分があり、筆記能力の低下を感じている。
- ・受入れ実習生が増えてきており、今年度は卒業生以外も受入

れた。しかし科目に偏りがあり、指導教員の割り振りも困難になってきた。

- ・実習日誌を読むと、文章量や内容の精度は大学によつての差というよりは出身高校による差だと感じている。また他校同様、筆記能力の低下が見受けられる。
- ・高校側の指導教員も学生もスケジュールに余裕が無く、実習開始後、潤滑に実習ができるように事前の準備やプレ実習的な期間を設けるとの対応も有効だと思う。

設問2

本学への質問や意見等

- ・大学によつては、実習期間を2週間とする大学、3週間とする大学両方があり、大学によつて取り決めているのではないかと。可能であれば3週間やったほうが、実りある実習になると思う。
- ・高校の教育実習生は教育学部からの学生は少なく、専門学科所属の大学生が多数である。
- ・教員を希望している生徒が多い高校では、教職課程が活発な大学への進学を薦めやすくなる。ぜひ今後も教職課程希望者を増やし、教壇に立つ学生を多く育ててほしい。

3. 考察

教育実習参加者へのアンケート結果から、実習校での受入れ状況については、好意的な回答が多かった。特に高校側の指導体制がしっかりなされていることに対しての意見が多かった。

学生が実習から学んだことについては、専門性のことよりも、生徒とのコミュニケーション方法や伝えることの難しさについての回答が多かった。これは、「教育実習」に参加して初めて経験することができることであり、大学内での模擬授業では得難いものである。そのため、大学としては、正課内外を問わず、学生が高校生等に教える・伝える機会を提供できる環境づくりが必要ではなからうか。

学生が考える本学の教職課程の課題点については、まず、模擬授業の回数を増やすことが多く挙げられた。高校生との授業内におけるコミュニケーションは実習でしか得られない経験により、具体的なシチュエーションを想定してのトレーニングの必要性を感じたためと考える。

さらに学習指導案の書き方に関するものが多かった。単純に指導案を書く回数が少ないことも考えられるが、2週間という実習期間の短さも要因の1つと考える。高校側の意見にもあるが、実習中に時間的な余裕はなく、指導できることに限界がある。そこに指導

教員が求める水準の学習指導案を手取り足取り指導することは現実的には不可能であり、実習生にとっては大きな課題となる。指導教員と実習生とが授業運営方法や指導案作成方法についての意見交換を、実習前の段階で機会を設けていくことが受入れ後の円滑な実習に繋がるのではと考える。そうすることで、高校側の負担も分散させ、軽くし、さらには実習生が授業以外で生徒に携わる時間の確保にも効果的である。

最後に筆記能力については、授業内での対応だけで解決できる問題ではないが、意識付けをしておく必要がある。

4. まとめ

本稿の目的は、「教育実習」での受け入れの現状と課題を、実習生への事後アンケート並びに静岡理工科大学教職課程教育実習連絡協議会での高校代表校（3校）からの意見聴取をもとに明らかにし、教育実習関わる教職科目についての今後の指導課題について考察するものであった。そして、以下の点について今後の課題点が浮き彫りになった。

- ・模擬授業や指導案の書き方をより充実させる。
- ・潤滑に実習ができるようにプレ実習的な期間や機会を設ける。
- ・教育実習期間が2週間では授業回数が少なくなる課題がある。3週間程度あれば実習生にとっても、より効果が期待でき、今後実習期間についての検討も必要となってくる。
- ・筆記能力は授業や新任研修でも指導される。特に漢字を書く機会を増やすことが必要である。

これら課題点について、今後の指導に活かしていくこととしたい。